

正誤表

ページ	場所	誤	正
10 頁	下から 11 行目	今回初参加	今回 3 度目の参加

【報告】 第12回太平洋芸術祭「閉会式」見物記
—グアムにおける文化芸術活動と脱植民地化・脱軍事化—

長島 怜央（法政大学、明治学院大学）

1. グアム代表団の横断幕

2016年6月4日、第12回太平洋芸術祭の閉会式開始から1時間ほど経った午後6時半頃にグアム代表団の番が回ってきた。会場の真ん中あたりに集まっていく数百人くらいのグアム代表団のうち、イ・ファンラライアン（I Fanlalai'an）というグループが「ギザ・マナタキロ（Guiya Manatakhilo）」というチャントを始めた。体を大きく揺らしたり叩いたりするそのチャントが終わった直後、グアム代表団のなかの12名が4枚の赤い横断幕を持って正面に向かっていった。

“DECOLONIZE OCEANIA” “FREE GUAHAN”

（オセアニアを脱植民地化せよ グアムを解放せよ）

広げられた赤い横断幕に書かれた白い文字を、私の近くに座っていた人が驚いたように声に出す。あとで分かったことだが、横断幕に使われているのはグアム代表団が身につけていた腰布である。ステージ横の大きなモニターに横断幕が映される。会場はざわついており、皆写真を撮っている。私もカメラの機能をビデオから写真に切り替え、シャッターを押す。それまで閉会式は和やかに進行し、私もリラックスしきっていたが、そのときは突発的な出来事によって会場の空気が変わったように思う。

これはグアムの脱植民地化運動の若きアクティヴィストたちからのメッセージであり、同様の境遇に置かれたオセアニアの他の人びととの連帯を表明するとともに、それらの人びとをグアムでの植民地主義に注目させること狙ったものである、と私は解釈した。オセアニアにおける芸術文化活動が欧米諸国や日本の植民地支配の歴史と切り離せないものであるということを再認識させられた瞬間であった。

2. 閉会式の見物

閉会式の会場は開会式と同じくハガツニャのパセオ球場であった。私は日本で学会発表があったため、太平洋芸術祭の最終日の2日前の6月2日の午後にグアムに到着した。そのため、閉会式は私にとってのメインイベントでもあった。当日の午後、会場の周りでは、炎天下のなか大きな日傘をさした、開場を待つ人たちの列が少しずつ長くなっていく。私は暑さに耐えられそうもなかったため、開場後に戻ってきて球場のなかに入った。すでにほぼ満席となっており、地元の人たちに混じって観覧した。

式開始の挨拶等が済むと、各代表団の紹介が始まる。スコアボードの前の野球でいうセ

ンター付近を中心にステージがあり、紹介された代表団が現れて、スピーチをしたり、歌ったりする。そして内野辺りまでぞろぞろと歩いて行って、歌ったり、踊ったりと、最後のパフォーマンスを見せていくものであった。開会式も同様のものではあったようである。おそらくこれまでの太平洋芸術祭のやり方を踏襲しているのであろう。各代表団のメンバーたちは、2週間にわたる祭が終わり、充実感と疲労感のただなかにあるように見えた。日差しが少しずつ和らいでいくなか、観客たちは代表団の活動をたたえつつ、最後のパフォーマンスを楽しんでいた。



閉会式でグアム代表団メンバーによって横断幕が掲げられた（筆者撮影）

前述のグアム代表団の行動のあとも、にわか雨による中断はあったものの、順調に式は進んだ。午後8時40分頃には、今回初参加となった台湾の代表団が、“Republic of China (Taiwan)”と書かれたプラカードを持つ人を先頭に、手拍子で歌いながら入場した。プラカードに続く3名のうち、2名がそれぞれ原住民族委員会の旗、1名が中華民国旗（青天白日滿地紅旗）を掲げていた。こうしたことは、違和感という用語があるが、新鮮に感じた。現在のオリンピックなどの多くの国際舞台では「チャイニーズタイペイ（中華台北、Chinese Taipei）」という呼称が使用され、中華民国旗が使用されていないということから生じる感覚であろう。中華人民共和国が太平洋芸術祭の参加国ではないし、太平洋共同体（SPC）のメンバーでもないということが関係していると推測される。台湾代表団が入場し終わると、白いフンドシ姿の6名の若い男性たちが真ん中に出てきて、周りの人たちの歌に合わせて踊った。「ソーラン」という囃し言葉の含まれた歌であった。この歌が何なのか、なぜこの場面で歌われているのか気になった。台湾に続いて最後に紹介されたのが、

次回開催地のハワイであった。今回のハワイ代表団に何名いたのか分からないが、閉会式で入場してきたのは 20 名弱であった。ハワイ代表団にバトンを渡し、主催者等の挨拶があって閉会式が終わり、あとは打ち上げでお祭り騒ぎとなるようであったが、終日強い日差しを浴びたせいか疲れてきたので 9 時過ぎには帰路に着いた。10 時 40 分頃には、滞在していたタモンのホテルの部屋から、パセオ球場の辺りで花火が打ち上がるのが見えた。遅くまで盛り上がっていたようである。

3. 脱植民地化討論連続企画

開催期間のうち閉会間際の 2 日余りしかグアムにいられなかったのが、プログラムに記載された多くの面白そうなイベントに参加できなかったのは残念である。パセオや各地域の会場だけでなく、グアム大学でもさまざまなイベントが開催されていた。そのなかのひとつに、「脱植民地化討論連続企画 (Decolonization Discussion Series)」があった。太平洋芸術祭ワークショップ委員会、グアム大学、グアム・コミュニティカレッジが共催で、5 月 24 日、26 日、31 日、6 月 2 日のいずれも午後 6 時からグアム大学の講義室で行われた。グアムで予定されている政治的地位に関する住民投票の選択肢である「州」「自由連合」「独立」について議論するという企画であり、最初の 3 回はそれぞれの選択肢の理解に、最終回は全体討論に時間をあてるようになっていた。私は最後の全体討論「独立、自由連合、州——グアムの地位選択肢の意味」を見学できた。グアム政府のグアム脱植民地化委員会 (1997 年設置) には、3 つの政治的地位それぞれのタスクフォースが作られている。今回の連続企画ではそれらのタスクフォース長、グアム大学教員、ハワイ・クック諸島・サモア・フィリピンから来た専門家、国際的に著名な脱植民地化の専門家カーライル・コービン博士 (Dr. Carlyle Corbin) が参加していたようである。

太平洋芸術祭それ自体から話が多少それてしまうが、グアムでは 2016 年 11 月の住民投票実施が以前から検討されており、同年 7 月には実施の可否を判断するとされていた。これはグアムで脱植民地化運動に取り組む人びとにとって大きな意味を持っていた。2011 年に就任したエディ・カルボ (Eddie Calvo) 知事は、フィリックス・カマチョ (Felix Camacho) 前知事のときに放置されていた政治的地位の問題に取り組むことを選挙戦時から明言していた。就任当初は 2014 年までの住民投票実施の方針を掲げ、脱植民地化委員会を再始動させた。しかし、住民投票は実施されないまま、カルボ政権は 2 期目に入り、2016 年になっていた。

話を戻すと、グアムで脱植民地化を議論し、住民投票を実施する機運が高まっていたということも、冒頭の横断幕の件のコンテキストとして重要である。ちなみに、結果的に住民投票は 11 月に実施されなかった。啓発活動が不十分であり機が熟していないとグアム脱植民地化委員会によって判断されたのである。2016 年 12 月によりやく脱植民地化委員会のヴィレッジ・ミーティングが北部デデドを皮切りに開始されたようである (Tihu Lujan, “Decolonization meetings kick off in Dededo,” *The Guam Daily Post*, December 15, 2016.)。



脱植民地化討論連続企画の会場で独立派が配っていたステッカー
(筆者撮影)

4. 会場の様子

太平洋芸術祭関連で他に何をしたら簡単に振り返ると、2日目にはタモンの南端に位置するチャモロ文化センター（Sågan Kotturan Chamoru）に立ち寄った。アメリカ領サモアの人たちが伝統的な蒸し焼きのウムをちょうど行なっていて、出来上がるころにそこいけば食べさせてもらえるとのことであった。奥に行くと、豚肉の分厚い切り身が干し網のなかにたくさん並べられているのを見た。別の場所にはチャモロダンスの踊り手たちがいて、客が来ると踊りを披露することになっていたようである。小学生から高校生くらいが中心のグループであった。私もチャモロダンスを見たいかと声をかけられ、20名くらいによる踊りを1人で見させてもらえた。他にもさまざまなチャモロ文化関連の施設があったが、マオリやサモアのタトゥーを入れる場所もあった。

その後、パセオに並んでいる各代表団の小屋の様子も見て回った。オーストラリアの小屋の前を通って知ったのだが、1992年にマボ判決が下されたのはちょうどその日（6月3日）であった。同判決について解説する国民和解週間のチラシも置いてあり、関連するアクティビティも行っているようであった。オーストラリアの小屋の前ではトレス海峡諸島民の人たちが見物人も巻き込んで踊っていたり、台湾の小屋のなかでは台湾原住民の人たちがウクレレを弾きながら歌い踊ったりと、太平洋芸術祭の残り少ない時間を惜しむように楽しんでいた。

また同日夜は、グアム大学の Rebecca Stephenson 名誉教授の紹介で、タムニンのビーチバーで行われたクック諸島代表団のファンドレイジングのショーを見に行くこともできた。ちなみに、閉会式翌日にはクック諸島代表団の打ち上げにも参加させていただき、20

歳前後の代表団メンバーたちからグアムの印象やクック諸島の話聞くことができた。



チャモロビレッジとパセオ球場のあいだに各代表団の小屋が並ぶ
(筆者撮影)

5. グアム代表団中心的メンバーの話

それ以外には、グアム代表団の中心的メンバーであり、チャモロの文化・歴史関連のグループを率いている A 氏から話を聞くことができた。彼とは 10 年前からの知り合いで、閉会式の日の昼頃にチャモロビレッジで遭遇し、後日久しぶりに話をするようになった。閉会式から 2 日後の午前中、グアム北部の A 氏の自宅を訪れた。コンクリートの平屋の A 氏宅はジャングルのなかにポツンとあり、辺りはハガッニャやタモンとは別世界である。A 氏の知人 2 名（同じグループで活動している B 氏と、A 氏の息子の友人 C 氏）も同席した。結果的に 5 時間近くにおよんだ話は多岐にわたった。まず、A 氏は太平洋芸術祭開催期間の 2 週間がとにかく暑かったということを強調した。それから、SPC 内部問題が今回の太平洋芸術祭に与えた影響（具体的には聞かなかった）について言及したあと、長年の知人であるマオリ代表団のあるメンバーと今回良い交流できたことや台湾代表団の参加を後押ししたことを語り、グアムでの太平洋芸術祭が終わってしまったということ感慨深げに確認しているようであった。さらに、彼の文化に関する持論、グアムの他の文化実践者や知識人への批判、家族の近況などに話はおよんだ。

ここでは、太平洋芸術祭に関する話で印象に残ったことを簡単に紹介する。今回の太平洋芸術祭の開会式でグアム代表団が入場したときのことである。A 氏たちのアイデアで、グアム代表団はグアム政府の公式の旗ではなく、伝統的な黒の旗とオレンジの旗を用いたという。これは A 氏たちのグループが以前から使用しているものである。太平洋芸術祭は

政府や政治家のものではなく「私たち」のものだからだと A 氏はその理由を説明した。この「私たち」は、チャモロ人全体、あるいは A 氏や B 氏を含めた文化実践者のことを指していると思われる。B 氏が YouTube にアップロードされたそのときの動画をスマートフォンで見せてくれた。A 氏はうれしそうにその動画を見ていた。閉会式のときの例の横断幕についてこちらから話を振ると、A 氏は興奮した様子でその行為への賛意を示し、携わった人物たちを高く評価しているようであった。B 氏は開会式にも閉会式にも参加していたため、そのときの様子を説明してくれたり、誰が横断幕を掲げていたのかを教えてくれたりした。ちなみに、C 氏（20 歳くらいの男性）はグアム代表団のメンバーでもないし、そもそも文化芸術活動に携わっているわけでもない。A 氏宅に居候しており、手伝いをしているようである。そんな C 氏は他の島の代表団の女性に恋をしてしまったようである。各地での太平洋芸術祭に参加してきた A 氏が「太平洋芸術祭というのは若者たちが恋に落ちる場なのだ」と C 氏を冷やかしながら語っていたのが微笑ましかった。

6. 太平洋芸術祭の脱軍事化

グアムや北マリアナ諸島は 2000 年代半ば以降、米軍増強をめぐる揺れ動いてきた。基地建設や米兵増員による経済的恩恵を期待する声がある一方で、マリアナ諸島のますますの軍事化に抗しようとする運動が展開されてきた。そのようななか、太平洋芸術祭から米軍関係者を排除しようとする動きもあった。

それは 2013 年 9 月にグアム議会に提出された法案 (Bill 179-32) に関するものであった。同法案は当初、第 12 回太平洋芸術祭の調整委員会に新たに 4 名の委員を加えるとした。グアム議会観光委員長、グアム商工会議所会頭、グアム・ホテル&レストラン協会会長、統合地域マリアナ (Joint Region Marianas) 司令官である。統合地域マリアナとはグアム海軍基地とアンダーセン空軍基地を管轄する司令部のことである。しかし、同調整委員会に米軍関係者を入れることに異議が唱えられた。ファノギ・グアハン (Fanohge Guåhan) というグループ名で行われた署名活動(「第 12 回太平洋芸術祭を脱軍事化・脱植民地化する」)の趣旨文によると、統合地域マリアナ司令官と商工会議所会頭を追加しないことが求められた。後者が対象となっているのは、「グアムの過剰な軍事化 (hypermilitarization) のためにロビー活動を行なっている」からである。その運動の影響によるものと思われるが、結果的にグアム議会の観光委員長のみを追加する内容に同法案は修正され、2014 年 2 月に法律 (Public Law 32-113) として成立した (Fanohge Guåhan, “Demilitarize and Decolonize the 12th Festival of Pacific Arts,” Change.org.)。

7. 横断幕をめぐる議論

例の横断幕はグアムで多少なりとも論議を呼んだようである。閉会式から数日後の地元紙『パシフィック・デイリーニューズ』の投書欄に、横断幕を掲げたグループのひとりであるキンシャ・ボルハーキチョーカルボによる「太平洋芸術祭での政治的声明は必要」と

いう文章が掲載されている (Kisha Borja-Quichocho-Calvo, “OPINION: Political Statement at FestPac Necessary,” *Pacific Daily News*, June 9, 2016.)。

そのなかでは、彼らの行動が必要であった理由がおおよそつぎのように述べられている。①太平洋芸術祭は太平洋島嶼国の抱える政治的問題等を思い起こさせるイベントであるということを示すため、②他の太平洋諸島民の抵抗運動との連帯を示すため、③グアムにおいてチャモロ人が脱植民地化を求めているという状況をこの地域や世界の人びとに伝えるため、である。①は太平洋芸術祭を彼らがどのように位置づけているのかに直接関係するので、ここで引用しておく。

太平洋芸術祭はわれわれ太平洋の諸コミュニティの美しい文化的の諸側面——歌、踊り、詠唱、詩、手工芸品、料理、航海術——を強調するイベントであるだけでなくということを実際に示す必要があった。われわれ諸人民の歴史的・政治的闘争について、われわれ太平洋諸島国（マリアナ諸島、西パプア、ハワイ、カナーキー／ニューカレドニア）の社会・政情不安について、何百年にもわたる植民地主義を生き抜いてきたわれわれの力のなかの美しさについて、われわれに思い起こさせるイベントでもあるのだ。

彼らの行動に対しては、はっきりと支持する者もいれば、困惑しているように見える者、太平洋芸術祭にそぐわないと批判する者もいたようである。そうしたことも、このような投書を行う理由のひとつにあるのだろう。他の箇所でも「太平洋芸術祭はたんに文化的イベントであるだけでなく、非常に政治的なイベントである」と述べられている。

その後も地元紙にはこの話題での投書がされている。グアム脱植民地化委員会の独立タスクフォースの共同議長の肩書きで、マイケル・ルハン・ベバクアとヴィクトリア・ロラ・レオンゲレロは「われわれは自由であるべき」を投書している (Michael Lujan Bevacqua and Victoria-Lola Leon Guerrero, “We Deserve to Be Free,” *Pacific Daily News*, June 19, 2016.)。ベバクア氏はグアム大学チャモロ・スタディーズ教員であり、横断幕を掲げた 12 人のうちの 1 人であるレオンゲレロ氏はグアム大学出版の編集長を務めている。

これによると、私は気づかなかったが、グアムだけでなく他の島々の代表団も「植民地化に抗する力強い声明」をしていたという。ほとんどの代表団の人たちが、「西パプアを解放せよ」「グアムを解放せよ」「ハワイを解放せよ」「ラパヌイを解放せよ」「オセアニアを脱軍事化せよ」「オセアニアを脱植民地化せよ」などと書かれた赤や白のバンドを腕につけ、互いに連帯の意を示していたというのである。この投書の主たちはつぎのように述べる。

歴史的に、太平洋芸術祭は、オセアニアの諸人民が互いの文化だけでなく互いの闘争を共有し、芸術においてだけでなく歴史的・政治的現実においてもつながりを発見す

るための空間でもあり続けてきた。「オセアニアの脱植民地化」「グアハンの解放」の要求は、われわれは互いに文化的にだけでなく政治的にも学ぶべきであるということを感じ起こさせてくれる。

また、グアムが政治的地位に関する住民投票の準備を行なっていること、マオヒ・ヌイ（フランス領ポリネシア）、カナーキー（ニューカレドニア）、アメリカ領サモア、トケラウもグアムと同様に国際連合の非自治地域リストに入れられていること、多くの島々で新植民地主義に抗する闘争が行われていることなどに言及されている。

投書の末尾のほうにはつぎのように書かれている。

太平洋芸術祭の真の目的は、オセアニアやわれわれ太平洋の諸人民を世界で類のない存在にしているものをたたえることである。植民地勢力が破壊しようとするにもかかわらず、何千年ものあいだ先住民芸術を創り、伝統を絶やさないことが、脱植民地化の行為である。オセアニアを脱植民地化することは、われわれの連帯を通じて、植民地化が残した遺産以上の存在としてわれわれが自らを見出すことができるということである。すなわち、観光地、核実験場、乗り継ぎの空港、エキゾチックな踊りをする身体以上のものとしてわれわれ自身をたたえることである。

太平洋芸術祭がこれまでオセアニアの人びとによってどのように議論されてきたのか、恥ずかしながら私はよく知らない。しかしながら、今回のグアム代表団の行為を、これまで開催されてきた太平洋芸術祭やそれをめぐる議論のなかに位置づけて考える必要があると痛感した。

以上、「閉会式」見物記」と題しながら、閉会式のなかで印象に残ったこととそれに関連する太平洋芸術祭開催前後のことを中心に報告した。日本からも多数のオセアニア地域研究者が現地を訪れたと聞いているが、終盤や閉会後に滞在していた方は少ないと思うので、何らかの参考になれば幸いである。

私は今回初めて太平洋芸術祭を見た。グアムでチャモロの踊り、詠唱、手工芸品、言語の復興に尽力されてきた方々と多少なりとも交流してきたので、そうした動きが地元開催でどのように花開いていくのかを見てみたいというのが一番の動機であった。残念ながら最後の2日あまりしか見ることができなかったが、大イベントのホストとしての地元の興奮を差し引いても、10年くらい前とは比べものにならないくらいチャモロ文化への関心がグアムで高まっていることは再認識させられた。ただやはり気になるのは、グアム人口の過半数を占めるフィリピン系やミクロネシア系などの他のエスニック集団との関係である。これについては別の機会に考えてみたい。

グアム代表団に関してとくに印象に残っているのは、さまざまな文化実践者たちがそれ

ぞれの理想を追求し続け、太平洋芸術祭という大イベントを自分たちの手で作ろうとする姿であった。チャモロ人の文化実践は、植民地化やアメリカ化に抗するもの、脱植民地化に関連するものでもあった。A氏が行おうとしたことは、文化芸術活動を政治権力や資本に利用されない自律的なものにしようとする取り組みといえるかもしれない。米軍やそれと癒着した経済界の太平洋芸術祭への関与を排除しようとした動きも、その運動を担った人びとの脱軍事化の意思だけでなく、文化芸術活動への真摯さをも感じさせる。